



# 君とぼくをつな ぐチューブ

10月13日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 10月13日のおはなし「君とぼくとつなぐチューブ」

案内されて地下室に下りる。非常階段のような鉄製の階段でカンカンと靴音がやかましい。階段を降りきると所長はくるりと振り向き、誇らしげに背をそらし、目の前の通路を示した。そこにはがらんとあいた円形の開口部があって、奥に通路がずっと続いていた。通路はゆるやかにカーブして先の方は見えなくなっている。先に進むのかと思って一步踏み出すと、腕をつかんで引き戻された。

「危険ですぞ」

「は？」

「不用意に中に入っちはいかん」

「中？」

「そう。これが話しておった発明じゃ」

「“じゃ”？ “じゃ”と言いましたか？」

「発明なのだ」

「これが、あの発明」

「チューブだ」

「チューブ？」

「そう。チューブだ」

「中部？」

「違う。チューブだ」

「ち……」

「恥部でもなく」

「……」

「秩父でもなく」

「なんで秩父と言おうとしたことがわかるんですか」

「それがチューブの働きだ」

「えっ？」

「嘘だ」

「じゃあ何て名前なんです。いやだなあ。チューブなんてヘンな名前だと思ったんですよ」

「そこではなく！ そこが嘘なのではなく！ 名前はチューブだ。チューブという名前は嘘ではない。秩父とわかったのがチューブの働きというのが嘘だ」

「ではなぜぼくが秩父と言おうとしたのが……」

「チューブの説明をさせてくれんかね、そろそろ！」

所長は息を荒げ肩を揺らしながら吼えた。そんなに大声を出さなくてもぼくはすぐ目の前にいるのに。

「いいかね。これこそが世紀の発明。ザ・チューブだ」

「“ザ”がつくんですか？」

「ザ・チューブだ」 さっきはただチューブって言ったくせに、反省の色も見せずに所長は続ける。「ここではないどこかへと続く道。異世界への回廊。時空を超える装置」

「北池袋とかに出るんですか？」

「そうではない。そういうアレではない」 いらいらし始めたかと思うと不意にくだけた調子で所長が言う。「ねえ、ちょっとヘンな合の手やめてくれる？ 全然進まないじゃん。話、ちっとも進まないじゃん」

「じゃあ北軽井沢あたり？」

「だから！ そういうんじゃないの！ そういう、何て言うの？ 電車で1時間あれば行けちゃうような、そういうあれじゃないの！」

「わかりました」 全然わからなかったけど、所長の取り乱し方が怖かったのでわかったふりをした。「そういう、普通にいける場所ではないんですね？」

「そうだ！ 我が意を得たりと所長が頷く。「その通りだ」

クアラルンプールとかだろ。そう考えていると所長がたたみかける。

「クアラルンプールとか、そういう、どこかよく知らない外国ってことでもないからな！」どうしてわかったんだろ。「これはつまり、貴君もご承知のように、かつて古文書『風誌』に記されたあの詩に歌われている装置なのじゃ」

「“キクン”？ “なのじゃ”？」

ぼくの疑問文には構いもせず、所長は歌い始める。節を付けて朗々と。

♪夢の中で、ぼくは走っていくよう。  
長い長いトンネル。  
滑らかな輝きの回廊。  
出口はまだ見えず、  
生きるものの気配もない。けれど  
ああそれは  
君とぼくをつなぐチューブ  
世界を橋渡しする永遠のチューブ。

文字にすると短いと思うかもしれないが、こういうのを節を付けて朗々と目の前で歌われるほど身の置場のない話はない。とても居心地が悪い。

♪霧の中を、彼は走ってくるよう。  
暗い暗いトンネル。  
包み込む灼熱の回廊。  
姿はまだ見せず、  
荒い息も足音もない。けれど  
ああそれは  
彼とわたしをつなぐチューブ  
いまだ見ず、聞きもせぬ世界にいたるチューブ。

気分良さそうに熱唱する所長をおいて、ぼくはぶらぶらとそのチューブの中へ入っていった。不意に歌声が途絶えたので、所長が怒ったのかと思って振り向く。そこにはもう出口はなかった。こうしてぼくはチューブの中をさまようことになったのだ。

(「チューブ」 ordered by izumi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 君とぼくをつなぐチューブ

<http://p.booklog.jp/book/35129>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35129>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35129>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.